

---

# 美しき主と疑うことを知らない下僕

いーぺい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美しき主と疑うことを知らない下僕

### 【Nコード】

N4703F

### 【作者名】

いーぺい

### 【あらすじ】

秘密だらけで美しい美貌の主人とまったく疑うことを知らない純真な下僕の日常生活

## 第一話 疑うことを知らない下僕

僕の主人は至生まれに見る美貌と頭脳を持ち合わせた年頃の人間である。

難点をいえば主人は夜行性な人物であるということぐらいだ。

朝に弱く、夜に強い。

主人のことを夜行性などと言う言葉で表すのは僕としては非常に心苦しいのであるがその言葉しか見当たらない。

僕の語彙は限りなく少ないせいであるのだろう。

夕方の5時。

主人がおきだしてくる時間である。

執事である僕は主人の扉を軽くノックした。

初めてのときは聞こえないものだと思い強くノックをしたら1週間も口を利いてもらえなく悲しい思いをしたものだ。

それ以降はこの扉であろうと軽くノックするように心がけている。

「ん……。起きた」

主人が起きて先ず必ず言う一言である、ここで働くようになってからチェックしていたのであるから間違いない。

そのお声だけでも僕は背筋にぞくぞくとしたものを感じてしまうほどに魅力的なお声である。

ああ、今日も一日かの主人につかえる幸せをありがとうでございます。

と僕は魔王当りに祈っておいた。

なにせ主人が神を毛嫌いしているのだ、魔王ならぎりぎり許すと言われている。

誰かに祈らずには生きていけない僕のために妥協までしてくれる優しい主人でもあるのだ。

まず主人は起きたてでは食欲がわかないらしくトマトジュース一

杯だけという非常に栄養が気なる朝食をする。

今は夕方だか主人にとっては朝食になる。

僕は主人が着替えている間にその朝食の準備をし食事の間で主人がくるのを控えて待つていた。

この屋敷には僕しか使用人はいないため主人は自分で着替えなければならぬ。

はじめには僕にもやらせようとしたのだが、ちょっといろいろ耐え切れずに主人は今までどおりになんか自分でやることになってしまった。ふがない自分を責めるばかりである。

主人の手間を少しでも減らし快適な生活をおくっていただきたいのに。

本日はどのようなお召し物だろうか？

昨日は真っ赤な色のドレス、薔薇の花びらのような飾りがとても似合っていた。

一昨日は夜の町にはえるような真っ黒なドレス、体の線をはっきりと現していたのがとてもよく似合っていた。

主人のスタイルは抜群であるのだ。

きつと一般女性たちには嫉妬の視線で見られているのだろう。

足音もきこえなかったという食堂の扉は開かれた。

目を伏せしずしと席につく主人はまるで軽やかな妖精のようだ。足音を立てずふわふわと移動するのだから。

そして僕が作ったトマトジュースをゆっくりとゆっくりと味わうように飲んでくださるのだ。

主人は低血圧なので、どうも起き立てではしゃべる元気もないのである。

僕もはなしかけるなど恐れ多いことはしない。

必要最小限の会話しか僕は主人とすることがないのだ。

あとは主人が僕を気にかけてくれるときなどである。

ふっ、と僕は主人の視線を感じ目を主人に合わせた。

主人の真っ赤な瞳は僕の魂を吸い込んでしまいそうなほどに魅力

的である。

できるだけさわやかな笑顔を浮かべることを忘れてはいけない。

「今日は帰ってこないから」

それだけをいうとまだ半分ほど残っているトマトジュースを飲み始めた。

「かしこまりました」

きつちりと45度の角度で頭をさげ、主人は帰宅しない。ということとを頭に刻み込んだ。

頭を上げたときには主人はぼんやりと立ち上がっていた。

これからどこにいくか考えているのだろう。

主人は朝食を召し上がったらすぐにお出かけになるのだから。

僕は隠し持っていた主人の愛マントをとりだし無言で主人の肩にかけてさしあげた。

声をかけようものなら「煩い！」との一喝をいただいてしまうことは経験済みである。

考え事をしているときに声をかけられるのは耐えられないほどにいろいろと気をお配りになるほど繊細な方でもあるのだ。

こんなに広い屋敷に僕がくるまで一人で住んでいたのだから僕がいることにまだなれない部分もあるようだ。

主人はゆっくりと音を立てずに歩き出すとそのまま扉からでていつてしまった。

そのまま出かけてしまうのであろう。

本当は玄関までお見送りに行きたいのだが主人がとてもシャイなため「するな」といわれているので早速、主人の朝食を片付けることにした。

最初に作ったところはめったに飲んでくださらなかったのに、のんだとしても一口だけだったり。

今ではゆっくりとだが全部のんでくださるようになった。

そのあとは自分の夕食を頂いたら寝ることにしている。

僕の部屋はこの屋敷で一番日当たりがいい場所にある。

どう考えても一番いいのだ。

昼間に干しておいた布団はふかふかとして気持ちがいい。

主人の布団も毎日干している。

主人は日光にあたっではいけないらしく日があたらない地下を部屋にしているのだ。

部屋の中はそれは豪華である。

まさに主人にお似合いのきらびやかな衣裳部屋や一流職人によって作られた家具。

誰からかの貢物のアクセサリー類、これがまたキラキラしているものばかりなのである。

僕が唯一もっている高いものといえば常に持ち歩いている懐中時計ぐらいなものである。

ああ、主人の顔を思い出しただけでも少し幸せな気分になれる。

主人に解雇されてしまえば僕の人生は終わったも同然になってしまう。

なので解雇されないように明日もがんばろう。

いくらお優しい主人であっても僕のように役立たずにいつまでもいられたらつらいだけだろうし

そして僕が目覚めたのはまだ日も昇らない時間帯。

まだ空は暗く肌寒い。

急いで執事服をみにつけ玄関先に立った。

これから主人が帰ってくるのだ。

お見送りはやらないのだがお迎えはしっかりとやらせていただいているのである。

今日も主人が一日無事にお帰りになるのをこの目でしかとみとどけなければ。

帰ってきた主人は血色がよく楽しそうに微笑んでさえた。

よほど外で遊ぶのが楽しかったのであろう。

主人が楽しいのであれば僕は満足だ。

「お帰りなさいませ」

「わらわの魅力はあいかわらずだな」

「はい主人はいつでもお美しいです」

さわやかな微笑みとともに思ったことを、そのまま口に出す。

主人は僕の頭をひと撫ですると、静かに地下にあるお部屋へと向かっていった。

きっとこれからお眠りになるのだろう。

僕は主人の姿が見えなくなるまで頭を下げ、いなくなつたと確信してから頭をあげた。

これからは静かに使用している部分だけを掃除していく、音をたてて主人の眠りを妨げるわけにはいかないのだ。

主人の屋敷であるのだから使われていない部屋も少しづつではあるが掃除することになっている。

主人には綺麗で豪華な屋敷が似合うのだから。埃まみれの屋敷なんて似合わない！

## 第二話 下僕の日中

いつもどおりに麗しの主人が寝室へと下がるのを確認したらエプロンを身につけるべくキッチンへと急いだ。

エプロンを身につけ作業道具を持ち、周りを見て忘れ物がないことを確認する、そしてすぐに屋敷裏にある森の少し先にある僕の自作の畑へと向かった。

「主人に食べていただくものは新鮮で美味でなければ！」

僕は今日も決意を改め主人のためだけに作成した自作畑にたどり着いた。

近くを小川が流れ森から切り離されたように開けた場所で太陽の光をたつぷりと浴びているトマトたちが今日もきらきらと輝いている。これを毎日収穫して主人のためのトマトジュースにしているのだ。

いつもなら収穫だけをして帰るのだが今日は、この子たちの世話をすることに決めている。

本来は草を抜かなければトマトが大きく育たないそうだが、僕は大きさよりも味を大切にしている、そしてなにより僕は植物を殺す行為、つまりは“抜く”ということができないのだ。

なので畑は草が立派に生えておりトマトと草の区別はよくみないとわからないということになっている。草に養分を取られまいと頑張っているみたいで味が売られているものよりも美味なのだ。なので、僕の信条と合わせて放置していることにしている。

僕がすることはトマトが実の重さで倒れないように添え木をしてやり水やりをすることのみである。

太陽がキラキラと輝き、水をはねる葉っぱもキラキラと輝いて見える。小川の中には小さいけれども魚が生きて土の中にも生き物が潜んでいるに違いない。鳥の鳴き声や獣の気配を感じ人間界での自然を満喫した。



ここには自然の動物以外には存在しないため気持ちが弾み、さらに奥まで足を進めた。

湖の姿が見えると同時にエプロンや来ていた執事服すべてを脱ぎ捨てて湖に飛び込んだ。大きな音ともに朝の冷えた水が体を引き締めるように触れてくる。

深くまでもぐりこみ目を閉じる、背中に意識を向ければ軽く体が浮かぶように感じた。体に抑え込んでいた翼を解放したのだ。翼にも冷たい水が触れ、瞬間震える感覚があつたが気にせず数度羽ばたく。

それに伴い裸の体は水面へと近付き勢いよく浮き上がった。

「ぶはっ！ 久しぶりに翼出すと気持ちいいね」

白い翼を羽ばたかせて運動させながらも口から出るのは軽やかな唄。鳥のさえずりにも祝詞にも聞こえる唄につられたのか鳥が集まり軽やかなさえずりを立てる、手を差し出せば手に腕にと小さな鳥たちは止まる。

唄を楽しみ、水を楽しみ、空や太陽、自然を楽しみながらも考えることは主人のこののみ。

今頃、自室で熟睡している頃で、見たことがないがベッドに深く潜り込み布団をかぶって静かに寝ていると予想をしている。きつと寝姿もきれいなのだろうな。

鳥を飛び立たせ湖から静かに出ると体をふくものがないことに気づいた。

「気持ちのままに行動をしないように、って主人にも言われてるのに忘れちゃったよ」

主人が困ったようにして言われた時のことを思い出せば呆けそうになるので慌てて首を振って考えを払い、エプロンの汚れていない場所で体をふいた。すぐに乾くだろうから大丈夫だとおもう。翼はすでにしまっている。

トマトを3つ取り、道具を片づけてきた道に戻った。屋敷はひっそりとだれも住んでいないかのように暗く静まり返っている。

草は伸び放題で室内をのぞくこともできないほど暗い。空気の入  
れ替え以外では家具が傷まないようにカーテンを閉め切っているせ  
いだ。おまけに僕は掃除が上手にできないから、普段使用する場所  
以外はきれいに保つことができない。

湖で時間をいっぱい使ったみたいで屋敷に入れば時計は昼過ぎを  
さしていた。

今日は布団もシーツも干していないから、さて何をしようか？

やっぱり、苦手だけれども部屋の掃除をするのが一番だ。

トマトをキッチンに置き、掃除道具のホウキと雑巾をもって主人  
から一番遠い場所にある客室を掃除することにした。泊まるお客も  
いないのでほこりを落とす程度の掃除しかするつもりはないが棚の  
上や窓枠にイスやテーブルどれも雑巾で何回も拭かなければきれい  
にならないような暑さのほこりがたまっていた。

まずは窓をあける。今までの掃除の経験で上から掃除したほうが  
後が楽だと気付いたのでホウキでとりあえず天井近くにあるほこり  
をたたく。そうすれば落ちてきて天井がきれいになるのだ。

「まずまずだね」

きれいになれば主人に褒めてもらえるかもしれないが主人はここ  
には来ないので気付かないかもしれない。それから棚を雑巾で何  
回も拭いてピカピカにして椅子もテーブルも同じようにする。

汚れた水をこぼさないように音をたてないように静かに静かにゆ  
っくりと入れ替える。

最後に窓を拭くことにして、執事服を脱いだ。着たままだと翼を  
出すことができないからだ。

窓から体を半分出して、翼を出して、そのまま雑巾を持って外に  
浮かんだ。鳥みたいに羽ばたけば浮かぶことなんて難しくない。そ  
れで窓を雑巾できれいに拭いて手で触って汚れがないことを確認し  
てから室内に戻った。

執事服を着ながら、赤く染まった太陽がきれいだと思った。主人  
の瞳のように赤く染まってきれいである。

「いけない！主人が起きる時間だ！」

夕日ということは、もうすぐ夜が来る。夜行性の主人が起きてくる時間なのだ。

キッチンで手をきれいに洗って、とってきたトマトを粉々に潰して水分だけをコップに移した。周りを汚すこともしていない。思わず笑いがこぼれた。

銀のお盆に移して今日は完ぺきだ。

「ああ、主人を先に起こしてこなくちゃ」

今日は完ぺきだと思ったのに、悲しくなってくる。僕が主人に拾われてから一日を完璧に過ごしていただいたことなど数えるぐらいしかないのに記録を伸ばすことができなかった。

主人の部屋を軽くノックすれば「ああ」の気のない返事。起こすより先に起きていたようである。

さらに悲しくなったが、これ以上の失敗をするのはよくないので急いでキッチンに戻りトマトジュースを運ぶ。机に置けば、扉が開いて主人が現れた。

今日は花を模した紺色のドレスである、それをちらりと脳内に焼きつけながら頭を下げた。

音も立てずに席につきトマトジュースをゆっくりと飲んでいる主人をみる。やっぱり綺麗だ。眉をよせて、少し不機嫌そうにしているようではあるが、それもきれいだである。

僕は今日も一日主人に仕える幸せをありがとうございます、魔王様。

「下僕」

僕が魔王様に祈りをささげていると突然、主人に声をかけられた。こんなこと滅多にない。

「はい、主人」

ほほ笑むようにしながら、さわやかをイメージしてドキドキしながらも返事を返す。声をかけてもらえるなんて幸せすぎて眠れないかもしれない。

ドキドキとわくわくで胸がいつぱいだ。

「ほこり臭い、汚い、身だしなみもできないのか」

冷たい視線を向けられたことに背中がゾクゾクとしたが、静かに言われたことを考える。

自分の恰好を見てみれば確かに掃除の時のホコリが執事服に付いていて、よく考えれば主人の前に出ているような格好ではない。

着替えればよかった。

「もうしわけありません」

かっと体温が上がったが、謝ることしかできない。どうして僕は考えが一步足りないんだ。

トマトジュースを飲み終わった主人は僕が肩にかけてあげようとしたマントを手で受け取り屋敷から出掛けて行った。僕が汚いから触られるのを嫌がられたんだ。

僕は主人が見えなくなってから、まっさきに井戸に向かって歩いた。そして執事服を脱いで頭から水をかぶる。何度かやればほこりはおちる。

汚れた服を着る気になれなくて、そのまま僕の部屋に向かった。

着替えることすら思いつかない自分に腹が立って午後に湖で遊べばよかったと後悔した。そしたらきれいになったのに。怒られることもなかったのに。

寝間着に着替える気になれなくて、主人の不機嫌そうな顔を思い出すだけで涙が出そうで、僕はいつのまにそのまま眠ってしまっていた。

### 第三話 探検者に困惑する下僕

今日も外出から戻った美しい主人が寝室に下がるのを確認してから自室と通路を簡単に掃除して自作畑に向かおうと裏口にある扉から出ようとすれば目の前に小さな人間が一人。

その表情は固まっている。瞬きをすることもなく視線を動かすこともなく僕の顔を見ながら体全体が固まっている。

「何か御用かな？」

主人以外の人間に会うのは始めてだ。お客だつてきたことがない。僕の問いかけにも口をかるうじてパクパクしているだけで答えることが出来ないようである。

お眠りになっている主人に心の中で、どうすればいいのかと問いかけてしまったが返事があるわけもない。そして思い出すのは主人の些細な行動。

僕が主人に頭をなでられると幸せを感じるようにびっくりしたままの子供の頭をなでてあげた、さらに硬直させてしまったようだ。固まった体をリラックスさせようと思ったただけなのだけれども。

「お、おばけーっ！！」

子供は叫ぶと僕の手をたたき落して柵のほうに素早く走っていく。止めようと思ったけど、どうすればいいのかわからないから伸ばした手を戻して叩かれた場所をなでる。

「ちよつと痛いかも」

頭をなでてはいけなかったのかもしれない。

畑にいこう、今日も主人に美味なトマトジュースを出さないと。ふふん、ふん、なるべく楽しく唄を歌おうと思ったが僕はさっきのことが、けっこう心にきてるみたいだった。僕怖かったのかな？主人には「まぬけ、ばか」とかよく言われるけれども「怖い」とは言われたことがない。今までだって言われたことはないのだ。

主人、僕は見た目だけはいいいのかと思っていたのですが勘違いだ

ったのでしょうか。僕の心をお救い下さい。

眠っているはずの主人にもう一度問いかけながらも祈ること落ち着ける。

自作畑にたどり着いたときに後で音が聞こえた、バタツという感じだ。慌てて振り返れば先ほどの子供が地面に倒れこんだままに身もだえている。

近寄り手を差し出そうとしたけれど叩かれたことを思い出して、見守ることにした。

そうだ、自分で立ち上がってくれ。

「かわいい少年が倒れて怪我してるんだぞっ助け起こしてくれたっていいじゃん！！」

見守っていたら子供が僕を涙目でみて訴えてきた。僕には至って普通の少年にしか見えないが、どこがかわいいのだろうか。さらにしゃがみこんで見守ることにした。

「怪我してるの？」

倒れたままじゃどこを怪我しているのかもわからないが自力で起き上がって地面に座り込んだ少年は泣きながらも膝を見せてきた。

確かにけがをしている、赤い血がツツと流れているがそれほどひどい怪我ではない、と思う。

「手当てしてよ」

むつつりとしながらも少年は僕に頼んできた。「触ってもいいの？」って聞いてみれば「いいよ」って答えてくれたから頼まれたけがの手当てをすることにした。

少年の近くにしゃがみこんで怪我に顔を近づける舌をのばして傷口をなめとった。ビクツと足が震えたけれども、それは傷が痛かったんだろうからと気にしないで血と泥をきれいにすればそこには怪我をしてなどいないかのように傷口がなくなっている。

うん、僕は満足だ。頼まれた傷の手当てを完璧にしたんだから。

「ヘンタイ」

だから、そんなことを言われて顔を靴で蹴られるのは違うと思う。

僕は変態じゃない。

「僕は変態じゃなくて下僕だよ」

「ゲボク？」

子供には難しい言葉だったみたいだ。

「ご主人様にお仕えする執事のことだよ、ほら僕、執事服着てるでしょ」

僕のために主人がお店で仕立ててくれた服を指し示す。同じのが何着もあるんだよね。これを着れることが僕の誇りでもあるんだから自慢したかった。

なのに反応は「ふーん」ってだけで不思議そうに治した膝をなでている。

「でさゲボクは天使様なの？けがとか病気を治せるのは神の使いでもある天使様だけってシスターがいつてたよ。見た目は天使様見たいにきれいだけど」

みんな同じ金の髪で青い眼をしているからかな？でも街では珍しくない組み合わせだと思うんだけど。主人の赤い目に真黒な髪の毛のほづが、凄く綺麗でほればれとするような組み合わせだと僕は思うね。

「うん、僕は天使だけど」

聞かれたのならちゃんと答えなくちゃいけない。

「やっぱりヘンタイだ、ってか頭が弱いだけだな、うん」

僕がきれいに傷を治したところを服の袖で赤くなるまでコスっている。なめられるの嫌だったみたいだ、嫌がられたことはなかったんだけど。そして顔の涙の跡もこすっているので赤くなっている。トマトみたいだ。

「俺、プツケって名前だよ。ここには探検で来たんだっ有名なお化け屋敷だからな。なのに居るのは自分のことを天使だと思ってるゲボクだけ。一瞬信じそうになったけど違うね、ゲボクには天使様の羽がないんだもん。ゲボクは頭が弱いだけのちよっと不思議な力を持つてる人間じゃん」

なんか哀れな目で見られているのは僕の勘違いかな？僕、本物の天使なのに信じてもらえてないみたい、けがを治して見せたのに。

主人は信じてくれたのに。

「なあ、おい。屋敷の中見せてくれよ、盗んだり汚したりしないからさ」

「ダメ、主人が寝てるんだから音を立てるのはダメなの」

「もう昼だろ！どんなダメな大人だよ。ケチー」

指を空に示して太陽の位置を教えてもらわなくても僕だって知っている。

「主人は立派な人間です。ただ太陽が嫌いだから夜に動いてるだけなの、ダメな人間じゃない」

そこは訂正してもらわないと、だって昼と夜は逆になってるけどちゃんと動いてるんだから外にだって出てるし。それにあんな立派で綺麗な主人がダメな大人というのには納得がいかない。

「…あのさゲボクの主人は本当に人間なわけ？お前、頭弱いからだまされてるんじゃないの？だってここ昔から吸血鬼がいる屋敷だって有名だよ」

キュウケツキが何かはちょっとわからないけど、自作畑についていることだしプツケがトマトをちらちらとみているから二つだけとってプツケに渡してあげた。お昼だからお腹がすいていたようで拭くこともしないで嚙り付いている。

おいしそうに食べてくれるからうれしくて笑いながら見ていたらヘタを投げつけられた。プツケは少し行儀が悪いと思う。

「俺の話を無視すんなよ」

そういいながらも、どうでもよくなったのか近くの小川で手を洗うとズボンでそのまま手を拭いてしまった、別にいいんだけど。

だって僕にはキュウケツキの意味がわからないから、なんと答えればいいのかわからなかったのだ。そういうときは黙ることがいいと。それを実行しただけ。

「まあゲボクみたいなのを雇ってるんだから悪いやつじゃないんだ



ろくな」

今度は反対に僕がプツケに頭をなでられた。主人がしてくれると幸せを感じるがプツケにしてもらうと少し嬉しかった。

「はい、僕を拾ってくれた主人は、とてもいい人なんですよ」

「はいはい、お前、ご主人様が大好きな犬みたいだな」  
鼻を鳴らされた。

しばらく黙って僕のことをみてたけど子供には似合わないような深いため息をつくと言転がってしまった。僕も真似して寝てみる。ちよつと楽しい。

「なあ、また遊びに来ていいか？」

「うん、いいよ。ここなら主人の睡眠の邪魔にならないからここに  
なら来てもいいよ」

「そつか、ならゲボクが一人でさびしくないようにまた来てやるよ」  
寂しくはないんだけど僕のことを思ってたらずごくうれしい。  
僕の返事も聞かないでプツケは手を振ると森に消えてしまった。  
帰り道は大丈夫みたいだ。

とりあえず探検という目的は済んだみたいであるし、できるだけ  
同じ時間にここに来よう。だって来たときに誰もいなかったらさび  
しく感じちゃうからね。

人間の友達なんて初めてだ。

いつもどおりに主人にトマトジュースを差し出したら腕を掴まれ  
てドキとした。僕の顔に近づいてくる主人の顔は僕にはめつたに見  
せてくれないような微笑みが浮かんでいる。

「血のおいだ」

そういつてそのままペロリと口のそばをなめられた。  
主人にこんなことをされたのは初めてで顔に熱が集まって考えが  
ぐちゃぐちゃになった。こんなことをされるなんて！

もしかしたらプツケの傷をなめた時の血が口についていたのかも

しれない。主人は耳と同じように鼻も、とてもいいようである。

僕がごちゃごちゃの頭でいたせいか気づいたら空のコップだけが目の前にあった、いつのまにか主人が出かけてしまっていたのだ。お見送りができなかった。

今日も完璧なお世話が出来ないままである。でも主人の細身の黒いドレス姿が綺麗だったな。

コップを片づけながらもなめられたことを思い出しては顔に熱が集まるのを感じて慌てて頭を振るということを繰り返した。

ブツケも舐められたのが恥ずかしくてこすっていたのかもしれない。

#### 第四話 主人に困惑する下僕

僕は今、凄く困っている。

なんでかってトマトジュースを飲んだのに主人は席を立ちあがろうとせず、そのまま本を読み始めてしまったのだ。

とりあえずコップを片づけてから戻ってきたのだが、光景は変わることなく本を読んでいる主人がいた。

こういった場合には恐れ多いが問いかけたほうがいいのだろうか？それとも何も聞かずに静かにこの場をさったほうが賢いのか？何かお持ちしたほうがいいのかな？本を読みやすいように明かりとか、寒さを感じないように羽織るものとかお持ちしたほうがいいのかな？ジツとみても答えはわからなくて考え続けることどれくらいだったかわからないほどになつてから主人は僕を見た。急いで背筋を伸ばして執事らしくしてみる。

「下僕は寝ていいぞ」

就寝の許可をいただいたが主人が起きているのに寝るなんて使用人としてはあるまじき、だと思われるので首を振って意志表示を試みる。

それに主人を傍でみていたほうが幸せだ。

「お前がいたとしても役に立たん」

はつきりと役立たずだと言われてしまったが僕は使用人なんだから。さらに首を振ればため息をつかれてしまった。

大人しく自室に戻ればよかったです、主人。いまさら取り消せない。

「主人は本日、お出かけはなさらないのですか？」

だって屋敷にとどまるなんて珍しすぎることだ、気になってたのだから仕方ない。

僕の問いかけに本を閉じて机に放り出してしまった。本に飽きたのか僕の問いかけに呆れたのか、どちらか区別がつかない。答えて

くれるのかな。

黙って壁を見ながらも煩わしそうにしっかりと溜息をついておられる主人を見ていて飽きない。後ろに黒バラが咲いているような錯覚を起こしそうだ。

「今宵は雨だ、出掛けるのが億劫でな」

なるほど壁ではなくて、その向こう側の向こう側ぐらいにある外を思っていることであるのか。

たしかに今日は朝から雨がやまずに一日中降り続いているから僕もトマト摘み以外では外に出てはいない。掃除をするにも窓を開けることもできないし室内は湿っているから埃を落とすこともできない、なので僕はガラスのコップを綺麗に磨いていたのだ自慢できるほどにぴかぴかと光るまで磨くのは久しぶりである。

「やることがない」

ちらりと僕を見て言い切られてしまった。えーと、何かを期待されているということかな？！

僕が知っている時間を潰せるゲームは・・・。

「しりとり、でもししましょうか？」

主人としりとりって楽しいと思ったのだ。ほっぺたが緩みそうになる。

「…しりとりか…」

「えーと、ご存じありませんか。単語の最後の言葉を次の人が引き継いで違う単語をいっていくゲームなんですけど。たとえば…」

「いい、ルールぐらいは知っている」

もしかして、しりとりを知らないのかと思って説明しようとしたのだけれども賢い主人に説明は必要なかったのである。主人が知らないことなんて屋敷にいるのより珍しいから、ちゃんと説明しようと思ったのに。

やりたくなかったのかな？面白いんだけど。どうなのかな、と主人の様子でやりたいのかやりたくないのかをわかってしまったのだけれども肩肘をついている姿を見るが、まったくわからない。

「まあ、いいだろう。たまには下僕と遊んであげる」

億劫そうに髪をかきあげるしぐさなんて惚れ惚れとしそうで僕は幸せだ。顎をクイツとして僕から始めるように合図をしてくれる。

「それでは、しりとりのり、からとなりますので、リスっ」

リスはかわいいんだよね、木の実を口いっぱいに入れてほっぺたがふつくらしながら、あのクリクリとした大きな瞳を向けられて手のひらにちょこんと手を乗せてくれると、すっごく嬉しくなる。かわいいんだよ。

「衰弱死」

「シカ」

シカも目がおつきくてジーとみてる視線がカツコイイんだよね、それに毛皮はあったかいし寒い時に抱きつくとしてもいい友達である。

「過労死」

「し、し、しまりす？リスはさっきいったから。違うので、し、し、し……」

主人に楽しんでもらうために始めたのだから僕で止まるわけにはいかないのだ。しししし、はっきり言ってたから思いついたものをとりあえず口から出す。

「獅子、でお願いします」

主人をうかがってみてもダメというわけではなさそうである、空気を吐き出していただけ。ちよつとズルかもしれないけどほかに思いつかなかったんだ。

「死体」

「イルカ」

主人はきれいに赤くひかれた唇を指でなぞりながらも躊躇わずに次々と言葉を返してくれる。その指先がたまらない。

「解剖」

「う？う、うま」

「埋葬」

「また、う、ですか。うさぎ」

「危篤」

「くま」

「抹殺」

「つばめ」

ここでやつと主人も言葉が思いつかないようだ、少しだけ眉をよせて考えている。さきほどから寒く感じているのは主人が次々とためらいもなくいった単語のせいかと思っていたが。どうやら部屋自体が冷えてきていたようだ。

外は雨が降り続けているから温度が低くなっているようである。

主人が視線をふつと天井に向けたのには僕は気付かなかったからドキツとした。

「目ざわり」

につこりと笑って僕をまっすぐに見て言われた言葉だがしりとり  
の続きですよ！？僕のことじゃないですよ！と力強く確認した  
いけれども、あまりお役に立てていないと自覚できているから何も  
言えない。胸に痛みを感じます。

「リス」

笑顔に見惚れてしまったことで同じ言葉をいつてしまった。さら  
に深まる主人の笑顔を見てしまうと負けてよかったと自分を褒めて  
あげたくなる。そして僕の顔は夕日みたいに赤く染まっていると思  
う。

「お前は獣しか知らないのか？それとも、わらわと同じように自分  
で一定のルールを設けていたのか？」

主人、どんなルールを設けたのか予想がつかまりましたけれども自ら  
難しくするなんて凄いです。なのに僕みたいに考えることもなくス  
ラスラと出てくるなんて頭の違いがよくわかりました。

「いえ、僕は動物たちと仲がいいので最初に思いついてしまったの  
です」

「では、これとも仲がいいのかな？」

主人は細長い指がそろえられた手を軽く掲げると、いつのまにか逆さにとまっている黒い動物を示した。

「コウモリですね」

「どう？」

残念ながらコウモリは夜に活動するせいなのか僕の種族とは相性が悪いみたいで仲良くなれない動物だった。悲しいけれども首を振って否定するしかない。

夜だけ活動するなんて主人そっくりである、だからなのかコウモリは主人につっつかれようがなでられようが反応を返すことはしていないよう。僕なら天にも舞いあがれそうなほどうれしいのに。

「これは使いだ」

そういわれれば主人がコウモリの足のあたりをいじっているのによく見れば手紙を外したようである。主人はそれを一読して胸元にしまいこんでしまった。

一気に機嫌が悪くなったのが僕でもわかる。

「主人、何か羽織るものでもお持ちしましょうか？」

いつまでも気温さがる部屋の中にいるのだ暖かくしていただかないと人間は風邪という病気になってしまうから。暖炉があるので火を入れて部屋を暖められればいいのだが主人が火の明かりを嫌っているためそれは出来ない。

「いや、必要ない。招待されたので出かけてくる、しばらくは戻らないから好きにするといい」

渡してもいないのにマントをひっかけると主人は外に出るのを嫌がっていたのがうそのように、あっという間に姿をけしてしまった。いきなりのことで頭を下げることも忘れてポケットと立ったまま見送ってしまった。

外出してしまった主人を追う必要もないのでコウモリと仲良くなるうと思つた。主人が座っていたあたりをみて、天井をみて、出入り口をみたけれどもコウモリの姿がどこにもない。

コウモリもいつのまにか姿を消してしまったようである。主人の

後についていつてしまったのかな？

「今日はすつごく珍しい日だった」

だって主人としりとりつてなかなか執事はできないと思うんだ。それにとつても楽しかったし。また主人と遊べたらいいな。こんなに主人と会話したのだって久し振りで、それだけで気分が高揚するのがわかる。主人は僕にとつて神様と同じくらいに素敵な人である。主人は「しばらく出かける」って言っていた、いつ戻ってくるのかわからない。どうか主人が怪我も病気もなく無事に戻ってこれますように。

いつものように寝る前に魔王あたりに祈りを捧げ、服を脱いでベツトにもぐりこんだ。いつもより遅くの就寝だけれども、充実した日であったことは確実である。



## 第五話 初めての来客に対応する下僕

夕暮れを過ぎてあたりは真っ暗やみのなか僕は腕を掴まれていた。相手は僕よりも背が高く赤と黒の混ざった服を着ていて主人には負けるけれどもとても綺麗な男の人であつた。肩までの髪の毛に真っ赤な瞳、力があるみたいで僕の腕を強く握っている。

たぶん、つかまれてから結構たっているのだけれども僕が聞いても何も答えてくれなくて僕のことを見てくるだけなのだ。

どうしよう？主人は、出かけているから屋敷を守らないといけなのだけれども彼は何をしに来たのかをしゃべらないからなやむ。腕を強引に解くことをしていいのかわからずに一時間も悩んでしまっていた。

「お前、オスか？」

やっとしゃべったと思つたら初対面の人に聞かれたことのないことを聞かれた。どうみても僕の性別は片方にしか見えないはずなのに。

「はい、間違いなく男に区別されるけど」

僕が答えたと同時に突き飛ばされてぬかるんだ地面に落とされた。毎日の雨で地面は雨と土が混ざってどろどろになっている、そこに落とされれば僕の執事服はぐちゃぐちゃだ。主人にいただいて大事に着ているのに。

「趣味が悪い、何を考えてんだか、天使なんぞ飼っておつて」

僕のことを嫌いみたいですごく怖い目で睨まれる、けど僕は彼のことを知らないのに嫌われるわけがわからない。勝手に屋敷に入るのかドアを開けようとしていた彼を僕は汚れていない手で彼の服をつかんだ。

主人がいらないのに知らないものを屋敷に入れることは留守を守れない、ことになるのだ。日々、主人の役に立てるように頑張っているのだから彼を入れるわけにはいかない。

「触るなっ」

見事に手をはたかれたがプツケの時のように悲しい気持にはならなかった。とにかく入れちゃダメなんだから、ともう一度手を伸ばそうとしたらにもまれていないのに飛ばされた。

二度目の地面で僕は無事であった執事服の部分まで汚してしまつた、僕が洗うとすぐ時間がかかるのに、それにうまく汚れも落ちないし。

「ダメです。主人の許しもなく見知らぬものを入れるわけにはいきません」

ドアと彼の間に入り込み彼を見つめながらも口に入った泥をハンカチに吐き出した。口の中が気持ち悪かったから。でも入れることは阻止できたようだ、僕を睨みつける瞳がさらに怖い。だからって僕はひかない。

彼はニヤツと笑うと腰に両手をあてちよつと背をそらした。小さな声で何かをつぶやいていたけど自分で納得したのか僕を見据える。「気に入らんが自己紹介をしてやろう。俺の名前はユリトア・ナゴバスチ。セーリアとはまだ友人だ。セーリアからはこの屋敷に招待を受けたのだ、なので中で待たせてもらう。俺は客人だ、もてなせ」言うだけ言うと僕を何の力でも押しつけて中に入ってしまった。えーと？何？僕理解できなかったんだけど？

とりあえず「客人」という言葉と彼、ユリトア？の「飲み物よこせー」の声で何かを持って行ってあげなければいけないという気持ちになったので準備していたトマトを使つてのトマトジュースを出すことにした。

勝手にいつも使用している食堂の席に座り僕が差し出したジュースを驚くように見つめている。

「トマトジュースはお嫌いですか？あとは水ぐらいしかありませんけど……」

そうなのだ、この屋敷には客をもてなすためのものは一切ない。紅茶やお菓子などを準備していることなんてないのだ。主人も僕も

そういったものを必要としていなかったから。

「ありえねえーだろ。茶じゃなくてジュースがでるって俺のこと馬鹿にしてんのか。セーリアに言いつけるぞ、コラッ」

怒られているみたいで心苦しいけれども、ないものをすぐに準備はできないから。

「えっと、セーリアというお名前は、もしかして主人のことなのでしょうか？」

僕が言いつけられて困るのは、主人しか思いつかなかった。上着を脱いでジュースを作っている最中も気にしていたことを聞いてみた。汚れた服を全部脱ぐわけにも着替えに行く時間もなかったので上着だけを脱いだのだ。

彼、ユリトアは驚いたように信じられないものをみるように僕を見てから大きな声で笑い出した。とつても楽しそうに笑っていたけれども僕には何が楽しいのかわからない。

「飼主の名前もしらねえのかよ、傑作だ！」

ということは主人のお名前はセーリアで間違いがないようである。うん、主人にぴったりでお似合いだ、風が吹いても倒れない花のように強いけれども、そよ風に揺らめく葉っぱのように可憐である。今度から心の中でセーリア様と密かに呼んでみよう。

「まあ、覚えなくてもいいけどな、俺がセーリアと結婚したらお前なんか消してやるから」

「ユリトアさんは主人の婚約者なのですか？」

「ユリトア様だっ、様付けしろよな。でないとその首とばすぞ」

首を飛ばすとは、解任ってことだね？でも僕のことを決めるのは主人であるはずなんだけど。彼にはできないはずだけど僕にはわからないことでもあるのかと思って「はい」とだけ答えた。

どうもユリトア様とはコウモリのように相性がよくないみたいだ、彼のことが何も理解できない。

「婚約者じゃないけど、そのうち、そうなるってことさ」

嬉しそうに言っているから主人のことが好きなことはわかった。

僕と一緒にだ。

そう思っただけだったから主人の声がしたとき僕はさらに嬉しくて普段はしないようにしているのだけれども駆け寄ってしまったのだ。主人にまっしぐらである。

「何をしている、ゲスが」

だから免れたのか後ろで大きな音がしたのはびっくりした。見たことがない明るい赤のドレスを着た主人のそばで振り返ってみればユリトア様が壁にたたきつけられたようだ。

主人の機嫌は最悪のようである。腕を組んでユリトア様を睨みつけている、迫力があって僕は感じたことのない暗いオーラのようなものを感じた。それがもっとも主人にふさわしい空気だとらわれるほどの魅力を発している。

「主人、お帰りなさいませ」

僕はうれしくてお迎えの言葉をいつていた、それに主人は「ん」と返事をするだけであるが返事があるだけでうれしい。数日だけではあるが誰も話し相手がいなかったんだから。

主人はすぐに飾りとして付けられていた剣を抜くと、ユリトア様に向かって歩いて行った。その背中からはさつき感じた暗いオーラが渦巻いているように見える。

綺麗だ、と僕はうつとりとみてしまったが。急いでその背中に飛びついた。

ああ、ごめんなさい。僕、泥まみれだったことを忘れてました。主人と僕との間でベチャツとした音がして恐々と目を向けてみれば乾いていなかった泥が見事に主人の綺麗な赤いドレスを汚してしまっていた。

剣でユリトア様を刺そうとしていた主人を止めることはできたけれども、主人のドレスを汚してしまったことがショックである。僕何してんだろう。

それにジンマシンで全身がかゆくなってきた。僕の手が主人のむき出しの肩に触れているのだ、すべすべして赤ちゃんみたいにつる

つるして気持ちいいけど僕は主人に触れるとジンマシンがでてしまう体質なのだ。おまけのように胸のあたりがちりちりと痛いのは気のせいかな。

「主人、屋敷が汚れます。それに生き物を傷つけることはいけません」

「それはわらわには関係のないことだ」

そういいながらも軽く振る払うようにするだけで僕を離すと剣をなげない仕草で放り投げる。

ズサツと突き刺さる音にユリトア様を見れば太もものすぐそばに剣は突き刺さっていた。ユリトア様しっかりとよけたみたいだ。よかった、血が流れなくて。

「下僕、湯の準備を」

僕はこちらを見ていないだろう主人に対してコクコクうなずくと急いで準備をしに行くことにした。最後にみた主人はさらに暗いオーラを増加させ、ユリトア様は真っ青な顔をしていたが僕は気にしないことにした。

主人の命令をかなえることが重要だ。きっと汚れたから綺麗にしたいんだろうし。

急いで風呂場に向かい、汚れがないかを見てからたつぷりと湯を張り風呂場全体が暖まったのを確認してから主人のもとに戻ろうとした。

まだ主人とユリトア様がいるはずの食堂は遠いのに悲鳴っぽいものが聞こえる。「ぎゃー」とか「いてえー」とか、近づいてもいいのかな？行ってもいいのかな？

悲鳴っぽいのが聞こえてから止まってしまった足をどうするか、時間をおいてからいこうか、でもそうすると湯が冷めてしまうし。やっぱ主人の命令が一番重要なので。

おそろおそろ食堂に近づきノックすると中から音が聞こえなくなった。なのでゆっくりとドアを開いていくと二人とも椅子にちゃんとすわっている。

よかった、聞き違いのようだ。

「主人」

「下僕」

僕が呼びかければ反対に呼ばれた。何だろう？ってしつかりとその顔を見れば、暗いオーラがうそのように、けだるげな視線をもらって困った。僕にはその視線の意味が分かりません。

「これを追い出せ」

主人が指し示したのは、なんか真つ青で怪我はないのにきれいな服がぼろぼろになったユリトア様であった。もうお帰りいただくことになったのか、僕はジューズを出しただけでもお持て成しはちゃんとできたかな？出来たよね。

「かしこまりました」

それを合図にしたかのようにユリトア様も主人に挨拶をして玄関にむかつていつてしまった。僕はお見送りをしなければならぬのに足が速くて後ろを小走りで付いていくことになる。

「あー疲れた」

とかユリトア様は独り言を言いながらも歩きながら身だしなみを整えている。

「そうそう、下僕。セーリアのところに客が来たら逐一俺に報告しろよな。そしたら結婚するときには命だけは助けてやる。おれのコウモリを使え」

さしだされたけれどもコウモリは僕を嫌がるかのように頭の上を飛び回っているだけである。ちょっと触ってみたいな、体についている毛は絶対に柔らかいと思うのに。

「本当に主人と結婚するんですか？」

だって主人はとってもユリトア様のことが好きであるとは思えないんだよね、ユリトア様だって最初は主人のことが好きだと思ったのになんか違うみたいだし。

「当然だな、セーリアと結婚すれば、いいことがたんまりとあるから。俺が第一位の婿候補である限りだ。ほかのやつらには近寄せ

やしねえ」

「はあ」

僕にはわからない理由で結婚したいみたいだ。それだと幸せになれないよ。

「噂の天使は噂どおり馬鹿だし、見に来るんじゃないかな。セーリアには八つ当たりまがいな苛められるし。あいつを呼びつけたのだってジジイどもなのに」

一人でのおしゃべりが好きなのかな、とか思ってたら玄関にっいていた。

「いいな。客が来たら忘れずに知らせろよ」

と僕の返事も聞かずにいなくなってしまった、確かに、すぐそこにいたはずなのに？

「んゝ早く帰りたくて走ってしちゃったのかな？」

まだ頭の上に飛んでいたコウモリに聞いてみたけど返事はくれなかった。

僕はコウモリと話をするのを諦めて、室内に戻り主人の部屋に入る。地下だから薄暗い。

気にせずに、着替えを持って風呂場に向かった。主人は着替えも持たずに湯に入っているはずであるから着替えぐらいはお持ちしないと。

風呂場に入り、着替えをおいてたら主人から声をかけられたので湯に浸っている主人の姿が見えない位置から返事をする。すぐ近くの薄布の向こう側が風呂となっている。

「わらわが出たら、下僕もお入り。泥だらけだから」

「はい！ありがとうございます」

そうだ、僕のズボンなどを汚している泥はすでに乾いてしまっているが言われてしまえば、執事たるもの常に清潔、という決まりを破っていることになる。頑張って服を洗おう。主人のドレスも汚してしまったのだから一緒にきれいにしなければ。

「主人、ユリトア様に」

「あれに言われたことはすべて忘れる」

「あ、はい」

ユリトア様からコウモリをいただいたから、どうお世話すればいいのかお聞きしたかったのだけどいいか。コウモリは自分で生きている動物だから。すべてを忘れるってことはお客様が来たらお知らせするってことも聞かなかったことにするんだよね。よし、わかった。約束してなくてよかった。

僕は脱いだままのドレスをもって風呂場からでた。

今僕が考えていることはいつになったら立派な執事になれるんだろう。使用人は僕だけなのだから主人の着替えだって風呂でだってお手伝いができるようにならないといけないのにじんましんが出るからと手伝ったことはないのだ。どうしたらじんましんって治るのかな。



## 第六話 緊張する下僕

セーリア様が眠りについたところ、僕は途方に暮れていた。

だって買い物に行かなければいけないのだ。

主人が眠りに入る前に、街で注文した香水が出来上がっているはずだからとお使いを頼まれた。もちろん僕は承知した！

僕がお役にたてることを主人に見てもらわないと。それでほめてもらったりなんかしたら幸せだと思ったから。

目の前にあるのはお金が入った財布、そう準備はとづくにできている。ほかに必要なものがあれば勝手に買ってもいいっていうご褒美まで付いているのだ、多分、何も買わないと思うけど。

僕は人間界に来てから主人とプツケとユリトア様以外の人間にあつたことがないのだ。プツケの時もユリトア様の時も突然であつたから普通に対応できたんだけど、自分から会いに行くことになるとちょっと違う気がして。

なんでだろう？すっごく緊張する。

すぐ近くに街はあつたけれども行く用事が今までなかったし、僕も行こうと思つたことはないのだ。それに屋敷には人間がこないから。

あー緊張するけれどもわくわくもする。どんな人間たちがここに住んでいるのだろうか？不慣れな僕は人間たちとうまく接することができるかな？

とりあえず行ってみれば、なんとかなるよね。

気楽に気楽に。

財布を胸元にいれ、キッチンの扉から外に出る。しばらくもせず屋敷の正門にでる、街からは少しだけ離れているために門の近くには人がいないようだ。

両手に力を入れて「うん！」と気合をいれれば、あとは普通にけるはずだ。門に手をかけ冷たい感覚が伝わってきて僕の心をどき

どきとさせてくれる。

この向こう側は僕よりも主人になじみ深い場所になるのだから、お役にたてるようにお使いをちゃんとしなければ。

「あのさ、ゲボクは街が怖いわけ？」

首を回してみる。

「うわぁー！人間！！」

びっくりして両手をあげながらも、いきなり現れた人間に心が止まるんじゃないかってぐらいに驚いた。

急いで姿が見えないところにかくれなきゃ、と思ったけれども足を蹴られて痛い。

なぜだ？

何もしてないのに蹴られるなんて、痛いよ。

「あのさ、なんで驚くの？遊びに来てあげたのに」

ぶすつとした、ちよつと怒っているような顔をしたプツケがそこにはいた。プツケに対して驚くなんて僕は感覚を鋭くしすぎているようだ。

「ごめん。これから買い物行かないといけないんだけど…僕、少しだけ大人の人間って苦手なんだ」

「ふーん、おれが一緒にいつてやろうか？」

「ありがとう！」

プツケの嬉しい申し出に僕は、すぐに感謝の言葉を言った。プツケがいれば、とっても心強い。

確かお店は中心街にある「シュベルツ」という名前だとプツケに教えたらず知っているようで手をつなぎ案内してくれる。

プツケは街の子供だけあってか、凄く店の名前や場所に詳しくて一度も道に迷わなかった。情けないことに僕は迷うことも珍しくないというのに。

「ほら、あの店がシュベルツだよ、貴族ゴヨウタシとかで高いんだって」

小さな指でさされた先には落ち着いた雰囲気のお店がたたずみ、中

の様子はわからない。そんなにお客もいなさそう。看板を何度見ても僕にはわからなかった、実は人間界の文字が読めないのである。お店があっているかどうかわからなかったけどブツケのことは信じているから、そのまま扉を開けた。

カラン。

軽い音が鳴り、奥から女性が姿を現す。

「いらつしやいませ、どのようなものをお探しですか？」

につこりと優しく笑っている女性。僕のことを上から下までみて何かを確認したようだ。

「ご家族へのプレゼントか恋人へのプレゼント、ご自分用など南から北までの様々な種類の香水を当店は取り揃えておりますよ。若様最後の呼びかけで誤解されているのかな？と思ってブツケに聞こうと思ったのに、横を見ても後ろを見てもいない。

どこっ！？」

お店の中にはいないみたいだから急いで外に出てみれば通りで、つまらなそうに空を見ている姿を見つけた。僕は駆け寄った。

「ブツケ、なんでいないの？心配しちゃったよ」

近くまで行って目線を合わせるためにしゃがみこんでみる、彼がないと僕はドキドキが止まらないのだ。傍にいてくれるだけで安心するのに、ブツケは街に住んでいて街に詳しいのだから僕よりも頼りになると思う。

「おれ、ただの子供だよ。あんな店はいれないよ、追い出されちゃうだけだもん」

「そうなの？そんな人には見えなかったけど」

僕に優しく笑ってくれたのに？お店を振り返ってみれば女性がこちらをみている、そういえば何も言わないでお店できちゃったんだよね。僕と目が合えば女性はやっぱりにつこりと笑ってくれた。

「いいから、早く行って来いよ。街の人たちがお前をみてるんだから、注目されたくないんだから」

？

「僕、変？それとも知らないうちに何か悪いことしたの？」

「違う。ゲボクは綺麗な顔してるし、いい服着てるから目立つの。おれまで目立つから早く終わらせていつものとこいこー」

服をひっぱられてお願いされている。ちょ、ちよっと可愛いかも  
うん、早く終わらせてプツケと遊ぼう。

「それじゃ、ここにいてね。すぐ終わらせるから」

気合いを入れて店に戻る。女性はやっぱりと笑っている。

「何をお求めで？若様」

「その、えっと」

そう香水を取りに来てお金を払うだけなのに、心が大きく暴れまわっている。僕、人見知りするタイプだったかな？そんなことなかったはずなのに。視線をあちらこちらに投げかければ香水とは別に端っこのほうにお菓子や飴が置かれている。

「あれも売り物なのですか？」

「はい、ちよっとしたものを付け加えて贈ると喜ばれるんですよ。」

一緒にいかがですか？」

「そうなんですか。それで僕は若様ではなくて、ただの使用人です。本日は主人に言いつかりまして商品を受け取りに来ただけれども、やっと真実を語ることができた。心が落ち着いていく。それでも女性の笑顔は変わらなかった。何か心当たりがあつたのだろう、僕をもう一度じっくりとみてから納得した様子である。」

「そうでしたか、これは失礼を。では、もしや貴方が“下僕”様でございますか？」

「はい、下僕です」

困ったように笑いながらも溜息をつかれてしまった。

「確かに承っております。少々おまちください」

僕は品物を受け取ることができて、待たせていたプツケのところ  
に急いだ。やっぱり女性は優しい人だったんだよプツケ。

「プツケ！買い物できたよ」

道に落書きしていたプツケは僕の声に顔をあげてから落書きを足

で消した。

「そんなことで喜べるんだ」

プツケの頭をなでてから僕はお礼にと懷から小さな包みを取り出してプツケの手に握らせた。掌を開いて覗き込む目がちよつと大きくなつて嬉しそうだ。

「あめ！」

「うん、付き合つてもらつたお礼だよ。主人が好きな物を買つていいて言つてたからプツケにね一個だけだけど」

「えへへっ」

「でね、プツケ。僕お花屋さんにも行きたいな」

僕は香水を包んでもらつているときに思つていたことを、そつとお願いしてみた。

「どこでも連れて行つてやるよ」

口に放り込んだ飴をなめながら嬉しそくに僕の手を握り締めて走るように僕をひっぱる。飴がすぐうれしかったんだと、それだけでわかる。

さつきよりも町の人たちに使われているお店が開いている通りに連れてきてもらったようだ。元気な掛け声とか笑っている笑顔があちらこちらで見かけられる。プツケもこちらのほうが落ち着いているようだ。

「ほら、ここが花屋」

案内された場所に連れて行かれれば、すぐさま「いらっしやい！何がほしいの？」とおばちゃんが声をかけてくれた。

「あのトマトの種はありますか？美味しいのがなるやつをお願いします」

「ゲボク、まだトマトそだてんの？あんなにいっぱいあるのに」

プツケに驚かれたけれども主人にはおいしいものを飲んでもらいたいんだもの。それに何かを育てることっていうのは僕にとって喜びだ。

「うん、大きくなるの見てるの楽しいから」

「おれ花でも買うのかとおもってたのに」

ああ、お屋敷に花を飾るのかと思ってたのか。

「お屋敷には飾る必要がないからね、それにお花なら畑の周りにも咲いてるでしょ」

「あれ、草じゃん」

僕とプツケが話をしていると花屋のおばちゃんがたつぷりと種が入っているだろう袋を差し出してくれる。

「これなら丈夫で綺麗な実をつけて育て方で味が変わるよ」

僕の手に乗せられた袋、元氣なエネルギーを感じる。

「うん、おいくらですか？」

袋を懷にしまつて反対にお財布を出した。値段をきいても高いのか安いのかわからないけれども、言われたおりに支払う。

お屋敷への道で僕はとっても満足であつた、主人に頼まれたお使いもできた。最初は何も買わないつもりだったけど香水を購入した後に、欲しいな、と思つていた種を買つてしまつたし、とっても満足だ。少しは主人の役に立てることができる。

思つていた以上に買い物に時間を取られてプツケが行きたがつていた畑は今度にするにしてお屋敷の前で別れて僕は玄関から室内に入る。室内は明かりをつけていないから目が慣れるまではまっくらに感じるけれどもすぐになれる。

そのまま地下へといき主人の部屋にそつとはいる。主人はいつか僕が想像していた通りに寝台に丸くなり眠っている。すべらかな肌、普段は鋭い目がまぶたに隠され、少しだけ開かれた唇、どれをとつても僕が今までにみたもののなかで一番。

僕は寝台から離れて、机の上に頼まれた香水と、ともに購入した造花の花を添えた。本物ではすぐに枯れてしまうから、ちょうどいいと思つたのだ。

「主人、おやすみなさいませ」

主人には聞かれないうちに、そつと、ため息が出るときのように声をかえて扉を閉める。主人が起きるまでにはまだまだ時間はある、

僕は自作畑にでも行こう。

大事な大事な主人。いつまでもお側に仕えます。

## 第七話 拾われた思い出に浸る下僕

地面にすわって畑の花たちを眺めながら、風の感覚を、土の感覚を、日差しや音を感じ取り自然の感覚をまんきつしていた。そうしていると小鳥たちや小さな生き物たちがあつまってきた暖かい気分になる。

何も考えないでいたら動物たちがいなくなってしまうって、なんでだろう？と寂しくなったら、そこにプツケはあらわれた。

二人で暑いからと水遊びをしていたら、いつのまにか畑の土とまぜたりして泥遊びになっていた。

プツケが服が汚れるからとはだかになったから僕もはだかになった。これなら執事服を汚す心配がない！

「ゲボクはどこでシュジンと出会ったの？」

突然プツケは思い出したように聞いてきた。

その可愛いめが聞きたい、聞きたい、といっているようだ。動物たちとおなじくらいに可愛い。

んふふ、思い出しただけで嬉しくなる。大事な大事な出来事だからすごく大事なことからよくおぼえている。

「別に聞きたくないけど、母ちゃんと父ちゃんのナレソメを思い出したから聞いてみただけだ」

ちよつと後ろにさがって嫌そうにプツケは言ったけど、何かいやなことでも思い出したのかな？

僕はきつと今顔いっぱい笑顔を出しているんだと思う。それくらいに幸せな出来事だから。

「主人とはじめてあったのは、この世界におりてきたときなんだよ。僕たちは誰にもしられないようにおりてくるんだけど、主人は感じた、といっていた。僕がおりてくるところに待っていたんだ」

神の世界からあらゆる種族が住む世界におりて人間たちの手助けを



するために僕たちは作られた。

作られた僕たちは適当に世界におとされる。

そして人の病や怪我を治して祈りをあつめるのだ。

それが力となって僕たちを成長させてるものとなる。

「僕はこの世界におりてきて初めてみたのが主人だったの。すつごく綺麗でまるでまわりがきらきらひかっているみたいで、もうね、主人しか目に入らなかった」

なんかプツケが目を細めてため息ついてる。

「そういえばゲボクは頭がかわいそうなひとだったな」

「うん、僕はきつとそこで頭がおかしくなったのかもしれない。本当に主人しかみえなかったんだもの」

美しい、ということばだけではセーリア様をあらわすことなんかできない。でも僕は「美しい人」だとかきこまれた。

僕のすべてに主人をかきこまれた。ただセーリア様のそばに。

あの夜にむかえてくれた主人は今と変わらずうつくしくて静かに、そこにいるだけでいきものを従えるものがある。

そつと触られた頭とかおもいだせる。

胸も触られた、滑るように羽をあてたみたいに柔らかくだけど、そこがこのごろいたむ。

「そういえば、あのときも僕、はだかだったんだよ。それでね、主人が執事服をたくさん作ってくれたの」

いたむ胸をなではだかだったことを思い出した。

泥で遊んでいたから、手も胸もつちいろになってプツケはもつといっぱいどろだらけになっている。

「・・・ふん」

僕の話を書いていないみたいだ、プツケは一生懸命になってどろで何かをつくっている。

聞いてきたのはプツケなのに。

「何つくってるの？」

その小さな手で泥を集めて形をととのえているけど、なにをつくっ

ているのか僕にはわからない。

「これはな、伝説の杖だ」

「でんせつのつえ？」

それってなに？その棒みたいなのでなにができるの？

驚いたように振り向いたプツケだけど、一人でうんうん、うなずいてる。

「ゲボクは知らないんだな、とくべつにおしえてやる。母ちゃんから聞いたお話で伝説なんだ」

にこにこ笑ってお話をしてくれるみたいだ。

「これは神様と魔王に勝った勇者の武器なんだ！これは杖にみえるけど下が剣になってて、杖としても剣としても使えるすげえー武器なんだ！！勇者は剣も魔法も使える凄い人間だったんだって、おれも強くなつて勇者みたいになる」

「おとくな武器なんだつ、でもプツケ危ないとしないでね。怪我したら痛いよ」

ころんだときみたいな小さなけがじゃなくて大きな怪我をしたら人間の力じゃ完全になおすことはできないんだから。

なおらないと死ぬことだってある。人間は僕たち天使と違って繊細な体をしているのだから。

「へんつわかつてる！」

落ちていた木の枝をひろつて、たたかいのまねごとをするプツケをみながら僕は主人に頂いた生まれてからの時間をゆっくりとおもいだした。

世界におとされたその瞬間に主人に出会い、そのまま連れられて屋敷に来た。

服を作ってくれ時間を図るための懐中時計をいただき、主人とともにいる時間にお世話をすることに幸福を感じる。

自然を感じるよりも動物たちと戯れるよりも薄暗い屋敷の中で主人の食事を見守ることのほうが幸せなのだ。

美しい美しい主人、セーリア様、僕の全てを奪ってほしい。

## 第八話 同郷天使に出会う下僕

ブツケと買い物をして以来、主人はよく僕にお使いをさせてくれるようになった。

だいたい女の人が使うものばかりだけど。最初にいった香水屋さんの薔薇という香水は気品がある主人にぴったりである。

僕は主人のお役にたてているようで嬉しかった。こんな日が毎日続けばいいと思っている。でも理由はわからないのに不安が胸の辺りで一杯になっっていることに気づいた。

だから久しぶりに空を飛んでみれば気分がよくなると思ったのだ。いつもの畑でうえのふくをぜんぶ脱いで背中に意識を向ければ、バサツと白い羽が広がる。力を加えれば前のように軽やかに僕を空まで運んでくれる。

屋敷が小さくなるまで高く飛んで僕は空を見上げる。

「神よ」

僕が生まれ育った神の世界に存在しているから空を見上げても見えるわけではないけど不安な心が落ち着かないのだ。

天使は神の使いだというのに、その神の助けを求めるなんて僕はなさけなさを感じてしまいそうである。

「ただ主人のお役にたきたい」

僕はそれだけのために存在している。

主人、主人。美しい主人。僕を拾っていただいたときの笑顔が忘れられません。

機嫌がいいときには唇に微かな笑いをのせて不機嫌なら少し眉を寄せて怒っているときには目がちよつとだけつり目になっているのだ。まるで恥ずかしがりやの妖精みたいで可愛いと思う。表情をはつきりと現しているときは感情が高ぶったときと演技のふたつあると思っているんだけど、どうなのかな？

目を閉じて主人の麗しい表情を思い出していたら目の前にうまれ

た世界のような懐かしい感じをうけて、ゆつくりまぶたをあげた。  
金髪碧眼で白い衣を纏った天使。綺麗な微笑みを浮かべて僕を見ている。

「こんにちは」

柔らかな声に僕も「こんにちは」と挨拶を返した。

同郷の天使。柔らかく微笑んでいたのに僕の羽をみて困ったようにはなしかけてきた。

「この辺りに私は派遣されてきたのですけれど天界のミスなのでし  
ようかね？それに貴方は足りないようですから交代なのかな？」

「はけん？足りない？こうたい？」

何を言っているのかわからない。僕と初めてみた天使二人で首を  
傾げることになった。

「この辺りに派遣されている天使ですよね？」

更に首を斜めにしている。僕は神の世界から降りてきたときに、  
すぐに主人に拾われたのだ。そういえばお使いらしいことは何もし  
ていない？

「違うかな？だっておつげが来たことないよ」

だから僕はお使いではなくて主人に仕えるために降りてきたに違  
いない。

「はあ、それでは体の維持が出来ないはずで何のために降りてきた  
のですか？」

信仰心が人間界での天使の体を保つ大きな要素であるから目の前  
の上半身裸の天使はなんなのだと疑問を抱くのは当然。自分のこ  
れからの行動が変わってくるのだからと遠慮ない天使であった。

「もちろん、主人のお役にたつためです」

げばくなのだからそれ以外にはなにもない。ただ最近は理由が分  
からないふあんをぼくのからだはうったえている。

「はあ、よくわかりませんが、それでは体の維持ができませんよ。  
それにあなたの口調は幼い、成長もできていないようですね。詳し  
い話は教会でしませんか？いつでも歓迎します。私は近くの町の教

会にいますから、いつでも来てください、・・・手遅れにならないうちに」

右手を上げたきれいなお辞儀をされて僕も慌てておじぎをしかえした。

「はい、主人が教会にいくきよかをもらえたらあそびに行きます」  
きよとんとした天使は「はぁ」と頷くと教会に向かって降りていくのが見えた。これからお使いとしての使命を果たしていくんだろう。

またズキツと心の辺りが痛む。そこを押さえながら僕は会いに行くべきかと考えた。

魔王様、僕はきょうかいにいつてからだのことを相談したほうがいいのでしょうか？神にいのつてはいけない、主人がかみを好いていないから。

空の上で気持ちよくなりたかったけど、なにもかわらないままに畑におりることにした。

少し残念に思いながらもゆっくりと下降した。柔らかな風が僕を励ましてくれるかのように吹いているのが少しばかり嬉しい。草の上に降り立ち脱ぎ捨てていたシャツのボタンを止める。

「ゲボクー！！スゴいことがおきたっ！」

ボタンを全部止めてズボンに入れてチョッキを拾い上げたところでプツケの元気なさけびごえが聞こえた。プツケ自身はまだ小さく見えるくらいの大きさである。

「どうしたの？」

こうふんして顔を赤らめながらも僕をひっぱるようになっているプツケ。

「教会にさ！天使さまが降りてきたんだよっ！すっごく綺麗で優しくうなのっ今偉い人たちがその歓迎会をするんだって。病氣の人や怪我した人を凄い力で直してくれるんだってさ、凄いよね！！ゲボクも一緒に見に行こう」

僕を引っ張りながらもしゃべっているけど僕はかなしくなった。

「・・・ごめんなさい、主人の許しがないときょうかいには行けない」

「なんでだよ、みてすぐもどればバレナイよ」

悲しくなった僕と同じようにプツケもかなしそうなかおをした。

「それに天使さま、さつき会ったよ。やさしそうな天使さまだったね」

「・・・ゲボクのばか・・・ずるい」

僕の服を握っていた手が離されて叩かれた。僕をにらみつけているかわいいめ。今にもなきだしてしまいそう。

それをみて僕はなにも言えなくなってしまった、ただプツケの姿が屋敷から消えていくのを見ていただけだった。

夜に主人がおきだすのをまって完璧に作りだしたトマトジュースをのんでいるのをみてふだんは主人のきげんを悪くしたくないけど思わずきいてしまった。

「きょうかいに遊びに行ってもいいですか？」

流れるようなしせんをむけられて白い頬、つきのひかりに輝くひとみ、唇がうごくだけのかすかな笑い。屋敷内は暗いのにそれらすべてが主人をひきたてる。

「ならぬ、あの空気は嫌い」

「はい」

ちよつとあたまをさげて頷いた。主人にさからうなどもつてのほか。その視線をむけてもらえるだけで嬉しさを感じてしまう。

天使さまにもプツケにも、もう会うことはないんだろうとかんじた。

外出するときに主人をするりと繊細なで僕のあたまをなでくださった。それだけで天使さまのこともプツケのことも僕のしあわせに入り込めなくなってしまう。

## 最終話 下僕の静かな辞職

「主人！お帰りなさいませ」

つい意気込んでしまった。

驚いた顔の主人はまた美しいがちよつと反省。

執事失格である。

外出からもどってきた主人はいつものとおりに血色がよく、赤く色づいた頬などいつも以上に麗しかった。

マントをうけとり主人のあとをしつかりとついていく。

おとをたてずにあるく姿、引き締められた腰、長いクロガミ、その動作ひとつにもしなやかで色をかんじる。あいもかわらずうっとりとしてしまうような後姿だ。

僕がいても主人はきにすることなくドレスをぬぎずるとそのままのお姿でベッドに横になる。

まるで胎児のようにまるくなって寝る姿がかわいらしい。

その姿がそれはもうかわいらしいのだ。

僕はマントを所定の位置に戻し、ドレスをかたづけると静かに部屋からでた。

心臓の高鳴りが通常ではないほどにはやい。

手足の感覚もわからなくなってきたようなようだ。

「主人、僕が一番大切な人」

これだけは伝えておきたかったけれども、主人は帰ってきたばかり疲れてそのまま寝てしまった。

それに僕がこんな状態なのを知らせることなんかできない。

余計な思いや思考を僕のために使ってほしくないのだ。

もともとはできそこないの僕は今まで過ごした時間だけで十分に幸せで。

それだけで、これからおこることに対する不安も恐怖も何もない。きつと僕的时间はほんとうにわずかのようだ。



やしきをめいいっぱい掃除をした。

僕がいなくなっても少しでも長くきれいなままにしたいくて隅々まできれいにした。

そして僕が使っていたものはすべてまとめて物置小屋へとおいた。本当はいつか主人の邪魔になってしまいかもしれないので処分してしまいたかったがこれらはすべて主人に用意していただいたものなのだ。

ていねいに畳んでひとまとめに布にくるみ片隅にそっと執事服をおいた。

その中に懐中時計もなごりおいしいけれどもいれる。

これを他の誰かが使うのも我慢できない。

なのでひっそりとこっそりと見つからないようなところに隠した。

全ての服をおいたから僕ははだかだけでも、それはおりてきたときとおなじだから何もおもわない。

たださいしょにもどるだけ。

さあ

最後に僕から主人にできることと言えばトマトジュースをつくってさしあげることしかでない。

あしためしあがっていたときまで美味しさがのこっていればいいけれども。

そつと、それを食事のまにおく。

これが僕の最後のおしごと。最後のふうけいとなるからとうごけなかった。

主人はのんでくださるだろうか？

「おゆるしてください、しゅじん」

きよかなくもどってしまう僕を。いう勇気がない僕を。

そろそろと暗くなりそうなそらをみてぼくはむねをみた。

むねが痛い。

天使である僕がいのりをあつめられなくては存在することもままならない。

もうじき消滅してしまうのだろう。

胸にはいのりをあつめるものがはいつていつかわれないう壊れてしまふようにつくられている。

胸が痛い。からだのなかでヒビがはいつていくのを感じる。

僕はもうじき消滅してしまうのだろう。

自然にそう思えた。

さいごだけでもいつもからだにおしこめていたつばさをひろげた。羽につたわってくるやさしい風。

とじてもないのになにもみえなくなつたため。

ぼくのそんざいはうしなわれる。

## 番外 セーリア視点

獲物を探しているときにわらわと反対の力を感じた。

そちらをみやれば闇と星しかみえないが間違いなく空から落ちてくる気配のある存在。

危険なほど空腹ではなくそれをみにいくのも、また面白い。

おおかた天使でもおとされてきたのであろうが。

吸血鬼の力ですぐにその場につくことはできた、存外のんびりな天使なのか未だに地上におりてくる途中のようだ。

天使は神の力に守られているのかわらわの力に反発しまわりに光をもたらししている。

かなり眩しい。

日の光にあたらず光になれぬ目では見づらいものがあるが、天使が降りてくればその力も散り元の夜にもどる。

予想にたがわずそこにはこちらを見あげてくる天使がいた。

天使の色をまとった全裸の少年が一心にみつめてくる。

反発するちからもなくなり、その頭に触れてみれば「きれいなんげん」との思考しかない。

どうやら人間以外の種族だとは、かけらも思っていないようだ。

魔の世界では今、愛玩動物を飼うのが流行っている。

そう、これを愛玩にするのも悪くはない。見た目は綺麗なのだからその心の臓にふれ、エネルギーを確認すれば満点。これならしばらくは”もつ”だろう。

「おまえは今から下僕にする。せいぜいわらわに奉仕して可愛がってもらおうよにな」

「うん」

ためらいもせず返事が来た。

わらわの服を任せている店へと連れて行き、服を作らせる。店の者は全裸の少年に困惑し赤くなっていたのが見ものであった。

まだ降りてきて間もないせいで天使自体は心ここにあらず、といった感じであった。

店の者に足りないものを買に行かせ、そのまま連れ帰る。

服の着方を教えられていたが自分で着替えることぐらいはできるの  
だろうな？

人型ではあるのだから使用人と変わらずにつかえばよいだろうと最初  
は考えていた。

：見事に使えぬ天使である。

反対の力ゆえにわらわに触れると拒絶反応をしめすため、身の回りの  
ことはできぬ、掃除等の使用人の仕事もできぬ、屋敷が汚れてい  
ようと気にしないが。

悪意はなく素直であるから言えば理解し実行する。

まあ天使のトマトジュースだけはうまいのでよしとするか。

吸血鬼といえども味覚はあり、戯れに血以外のものを摂取する。

一番は成人になりかけた若い者の血がうまいが。

体を休めている時間たいに人間の子供が天使のまわりをうろついて  
いるのには気づいていた。

まわりの人間は近付かないが、たまに子供が怖いもの見たさが侵入  
してくる。

放置しておけば帰るが、どうやら天使になついているらしかった。

人間にとつてはみめ麗しくただ優しい天使は好意的な存在であろう。  
その力も日々、弱っていくのはみていればわかったが、そういった  
ものだ。

忌々しいことに一番近い町の教会に天使が降臨したことも一因であ  
る。

天使は近いうちに崩壊する。

崩壊するからといって何も変わりはない。

その体が塵に戻るだけのこと。弱弱しかった気配は消え失せ、屋敷  
には何も残らない。

あれがいたことを知っているのは、ごくわずかなものだけ。それも時間が経てば誰もが忘れる些細なこと。

わらわの生活から天使特製の飲み物がなくなっただけのことよ。

崩壊した天使の残骸である塵を集めて手元に残していた。

太陽の光を長時間浴びた吸血鬼と同じような消滅の仕方をするとは神も面白いものを作る。

われらを嫌っておるくせに。

これにわらわの血と力をなじませつつ加えてゆく。

さて、何が生まれるか。

それから数年がすぎ、きまぐれに血と力を与えていくが変化はみられない。

食事をとりにいこうと屋敷をできれば人間の若者が離れたところまでこちらをみていた。

「お前が主人か？」

ごくりとつばを飲み込む音が聞こえ緊張をしているのがわかる。

今宵の食事は、この若者にしてしまおうか

種族特有の美しさが、この若者を惑わそうとしているのがわかる。

「お前は下僕にまとりついていた子供だね？」

気配はあのと時のまま、それなりの年月が過ぎていたようだ。わらわの問いに若者は確信をえたようだ。

「下僕はどうしたんだ、あれから天使様がきてから姿をみてない。

お前が食ったのか」

人間とは本当に感情豊かである。

その姿には恐怖、後悔、怯え、欲求が見える。

面白い。

「特別に教えてやろう」

若者にせまり、その首元をなめあげる。

抵抗しようとしたが体はすでに動けまい。

「あれは天に帰ったのさ、人間があまりに美しくないからとね」

牙を突き立て、そこから流される血、それにふくまれる生命力がわらわの体を刺激しておく。

これが吸血鬼の食事。

力が抜け気絶した若者をそこに放りだした。また懲りずにくるだろうから。

そこから若者はわらわに食べられても懲りずに通い詰めてきた、正体をしつてもなお来るとは余程こころのこりがあるようであった。

塵であったものが血と力によって質量を増やし、それに変化をもたらした。

生命力を感じるのだ、なじませ続けたかいがあつたようだ。

それは赤子に変化した。

黒髪の赤い瞳、だがその背には黒い羽があつた。天使の輪郭をのこしたまま闇に落とされたもののように見える。

幼い瞳でこちらをみあげてくる姿が天使がおりてきたときを彷彿とさせる。

ちようど良い。

若者に育てさせるか。今宵も屋敷前に来ていることであるし。

「わらわの子ともいえるものだ、育てて見せておくれ」

口を引くだけの笑みとも渡せば、若者から成長した男は口を引き攣らせた。

「いつ子供なんて作つた」

「生んだわけではない」

赤子は何も分かつていないのか男の手をしきりに触つてなめている。それを嫌がったのだろう抱え直して嫌そうにこちらをみた。

「背中に羽があんだけど…」

「そうなの」

「下僕に似てるのは気のせいかな？」

「似ているというより本人だの」

「…」

「よく育てよ、わらわは生まれた地に帰られねばならぬからな。この屋敷をそちに与えよう」

「おいっ！」

そろそろ生まれた家がきな臭くなってきたのだ、わらわにかかる火の粉は早くに処分したほうがいい。

あの男もひつこいほどに蝙蝠をよこしてきてうつとおしいばかり。仕置が必要だ。そう、恐怖に顔がゆがむような仕置がね。

## 下僕主人設定（前書き）

最初は美しい表現を使えるようにしてみよう！という目標があったんです。

そのために美しい主人公を据えたのに……  
まったく出来ず。

時間的余裕が最近できたので中途半端に書き綴っていたものを強引にまとめて完結とさせて頂きました。

つくづく自分には文才がないんだと思い知らされてしまいました。

本当は、こんな設定もあったんだよ、というもののだけのページです。



## 下僕主人設定

主人は今夜も出かけている

いくときには血色の悪い顔も帰ってくる時には血色よくてかてかと光っているように思える。

何よりも、その満足げな表情が僕を捕らえてはなさない。

毎夜のようにうれしげに戻ってくる主人

「主人、今夜もうれしいことがあったのですか？」

「ああ、今日の食事もうまかったからね」

綺麗に引かれたかあい唇をなぞる指先。

それはもうたまらない光景であるが、長年主人に仕えている僕にはなれた光景であつた。

「食事なら私をご用意しますのに」

少々いじめてみるが主人は答えた様子もない。

「・・・本当に君は出会ったところと変わらないね」

吸血鬼に（知らずに）仕えているボケ僕のはなし。

＊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「僕と初めて会った時は怪我して泣いてたよ」

「う、うるさい！俺は痛みに弱いんだよ」

「堂々と言うことではないのう」

主人の眼はプツケをみつめた。

「天使は優しさでできています」

ひどいことや気づ付くことショックを受けると体に崩壊の兆しが現れる。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

主人<セーリア>

一人称「わらわ」赤い眼、黒い髪。魔王とは幼馴染。耳も鼻もいい。顔もスタイルも頭もいい。

広大な屋敷で一人暮らしをしている。気まぐれで下僕をひろった。毎夜毎夜、食事のために街におりていく吸血鬼である。

下僕の正体を知っているが気にしていない、なぜなら下僕は弱いからである。そして信仰されているのを知っているから。気まぐれにかまってやるの、面白い。

天使がおりてきたのを感じ取り、ペットとしてそのまま拾う。ばかでまぬけなため簡単になついたが思っていた以上に使えないこと驚きつつ放置。

天使が作るトマトジュースはなぜかおいしく感じるために、毎日がかさず飲んでしまう。

幼馴染が魔王である。主人自身もそれなりに身分なるもの。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

下僕

一人称「僕」見かけは15、6歳。立場は執事だがほかに使用人はいないため、なんでもいい。嘘をつくこと、殺生はできない。

祈りをささげるのが癖、裸になるのも癖。

主人から頂いた服と懐中時計は宝物。

ただ主人のためだけに尽くすことを目標にしているのだが空回りをすることも珍しくない。

食べ物を摂取する必要がなくきれいな水さえあれば生きられる。

主人に触れるとじんましんがでる。いつかユーリア様って呼んでみたいと思ってる。

下僕は天界から人を10人幸せにする修行のためにおりてきたが、まっさきに主人に気まぐれに拾われる。魔界ではペットを飼うのがブームになっていたのでセーリアはペットを拾ったつもりかもしれない。手間のかからない。一目見た瞬間から主人にまっしぐらの犬の如く慕いしたがっている。すっかり修行のことは忘れて毎日、主人のためだけに働く。

そして主人のことは人間だと信じて疑っていない。そのため屋敷から出たことはなく執事服や懷中時計は主人が用意したものである。ブツケは二人目にあつた人間。

ユリトアは三人目。

少しずつ町にも慣れていたが、天使の体は思いを寄せてくれる人がいないと崩れてしまうほどもろいため天界に帰らなければならない日が近づいていた。本人は気付いていない。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

ブツケ

一人称「俺」

近所の子供。親に連れられて教会によくいくが信仰心はない。シスターにかわいがられている。まわりに馴染めずいつも一人でいる。ゲボクは名前だと思っており、頭が弱くてすぐ裸になったり傷口を嘗めるのでヘンタイだと信じて疑ってない。普段はいい子ぶっているが下僕の前では生意気である。

友達がいらない。教会の孤児院から養子に貰われてきたので、どうしてもいいのかわからず馴染めない。引き取り先の夫婦はともいい人たちなので余計に困惑している。そのため噂の屋敷に侵入したところゲボクにあい、ひとりでさびしかつたからよく下僕に会いに行く。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

ユリトア・ナゴバスチ

一人称「俺」赤い瞳、肩までの髪。それなりに綺麗。天使なんて下等な生物と思つて動物扱い。性格悪い、だからか主人の第一位婿候補らしい。

まんまと婿になるために頑張っているが高慢なセーリア自身のこと  
は苦手である。セーリアのほうが強いためかなわないから。

セーリアの婿になつて一族を支配に置くことを望んでいるが、のぞみは薄い。セーリアが結婚する意志なんてゼロだからだ

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

シュベルツ

高級香水屋。女店主

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4703f/>

---

美しき主と疑うことを知らない下僕

2011年7月24日17時31分発行